

回	No.	区分	委員名	意見要旨	事業者の説明、見解等要旨
1	3	事業計画	梅崎委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回の改変で地形・地質に関しては、一番大きいのは砂防堰堤を作り掘削するところになる。準備書1-19ページには流域面積が示され、砂防堰堤の高さが10mで掘削延長が100mといった計画が記載されているが、ここだけではすぐ安全側にとっているのでは、高さなど幅をもって設計の例をあげてもらった方がよいと思う。 また、せっかくボーリングされているのでボーリングとの兼ね合いで説明していただきたい。 	<p>【事後回答(第1回水象部会)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 調整池の堤体の高さおよび調整池の湛水範囲について、自然への負荷を軽減するため必要な50年確率の規模を確保した上で、改変範囲を縮小できる計画案を再検討します。
1	4	事業計画	北原委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 調整池の上流側に円筒形のφ600mmの筒を付けるということで、現地ではオフィスのメンテナンス用だという話をお伺いした。先ほどの説明だと出水した時、上の縁から下に水が流れ落ちるためにあるという話だがどちらが正しいか。 では先ほどの説明とは違い、出水の時、オーバーフローしそうな時には放水路から出ていくという形でのいいか。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在想定している排水塔はメンテナンス用でございます。オフィスは排水塔の外側につけておりますので、例えば大雨が降って詰まったり、その他色々な問題が起きた際に人が降りていくときに非常に危険なので排水塔の中に足掛けをつけて降りていくことを考えています。 そのとおりです。 <p>【事後回答(第1回水象部会)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 調整池は対象流域内における50年確率降雨強度まではオフィスを経由して放流を行い、調整池の許容貯留量を超えた出水については堤体に計画する余水吐から放流する形となります。 なお、調整池内に計画する排水塔(現在の計画ではφ1500の筒状の施設)については、濁水の流出抑制機能を付加するために詳細の構造については今後検討して参ります。 排水塔の構造については、浮力に対応できる構造としてコンクリート製とします。
部1	1	事業計画	北原委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料2-1では調整池に4基のオフィスやフィルターが設置されているが、これまでの説明では明らかになっていなかった。また、余水吐もコンクリート製に変更する説明もあったが、準備書で記載されている調整池の構造や規模も大きく変わるということか。 <p>(鈴木部会長)</p> <ul style="list-style-type: none"> 改変面積が小さくなるように調整池の大きさを変えるということは、準備書そのものの前提条件が変わってしまうのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 堤体自体のダブルウォールの構造は変えません。調整池の堤体自体は余水吐も含めて変えず、現状のままでいく予定です。 準備書で取水塔と書かれておりました排水塔については、1500の筒状になっているのですが、調整池の水位が上がってくると浮力に対応できないためコンクリート製に変える予定ですので、排水塔の構造は変わります。 調整池で水が貯まる湛水エリアについても、できるだけ改変範囲を狭くし、かつ少ない降雨に対しても出来るだけ早期に水面が広がる構造にしようということを検討している状況です。 様々な御意見を頂いていますので、それを踏まえて評価書に向けて調整をさせていただきたいと考えています。
1	5	事業計画	鈴木委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 洪水については、雪がある所に雨が降るレインオンズノーが非常に危険だと議論されている。この地域は春先に雪が残るので、そういった際に雨が降ると単なる雨だけの問題ではなくなる。そのことを踏まえると、すぐ安全という説明は腑に落ちないので、レインオンズノーについてもご検討いただきたい。 	<p>【事後回答(第1回水象部会)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 調整池の設計においては、現行の設計基準に準拠して進めておりますが、ご指摘を踏まえて現計画の妥当性について検証して参ります。 <p>【事後回答(第2回審議)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 次の手順により調整池の安全性を評価した結果、調整池の貯留可能量がレインオンズノーに対しても対応出来る事を確認しました。 ① 過去10年間の気象データ(資料1-6①)より最大の積雪深を抽出し、その積雪が対象流域の全てに存在すると仮定 ② 同資料より、積雪期間における日最大降水量を抽出し、その降雨の時間変化による実績降雨波形をモデル化 ③ ②の実績降雨に対して積雪が1日で全て融雪すると仮定して、融雪量を降雨量に按分して付加 ④ 以上のデータを元にして必要調整容量を計算した結果(資料1-6②)が、調整池の設計基準による必要調整容量と比較して小さい事を確認
部1	2	事業計画	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> レインオンズノーに対する安全性評価に用いた積雪水量の算出法を提示されたい。 	<p>【事後回答(第2回水象部会)】</p> <p>諏訪観測所の過去10か年最大の降雨量と積雪量を抽出し、最大時の降雨波形を観測データより検討しました。その降雨波形に積雪量1cm=降雨量1mmと換算して、降雨量に対して比例配分した降雨波形を作成しました。得られた降雨波形をもとに、厳密解法によって容量計算を行いました。(資料1-3①、資料1-3②)</p>

1	18	水質	鈴木委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料2-1スライド52番の浮遊物質量の値について、雨が降った際の現況の実測値に対して予測値が非常に小さくなっている。調整池で沈砂させて上澄みだけを出すのであれば理解できるが、調整池は下の方から排水することなので、綺麗になるとは考えられない。また、工事後は流出係数が0.9で流量が現状より増えるので濁水になる。なぜ予測値が半分低減されているか説明が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 下の方から水が抜けていけば御指摘のとおり滞留効果は見込めませんが、工事中は調整池を沈砂池として活用する計画です。本日の資料はダイジェスト版の為省略しておりますが、排水塔を設置し、一旦貯めて、排水塔の上部から水を流下させる構造になっていることを前提に予測しております。
1	19	水質	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 4-5-14：調整池堰堤のオリフィスは、工事中供用後とも開口しており、オリフィスから濁水が流出するはずである。また、調整池内に濁水が流入したとき、流入水には流速があること、オリフィスからの流出水にも流速があること、しかも、オリフィスは調整池の底に近い部分に開口しているため、高濃度の濁水が流出すると考えられる。このため、式中の濁水発生量が流出係数（水象項述）の修正でさらに大きくなることとあわせて、式が静水を対象としたものであり使用できないと考えられる。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>【工事施工中】</p> <ul style="list-style-type: none"> 工事中は土砂流出防止の為に沈砂池を設けます。 林地開発基準(200～400m³/ha/年)に則り、設計堆積土砂量を400m³/ha/年として、浸食土砂量を次のように想定します。 浸食土砂量 V=99.1ha×400m³/ha/年=39,640m³ 仮設沈砂池を4箇所設置(V=300m³)し、1箇所当たりV=9,910m³の浸食土砂を対象とします。 仮設沈砂池は、10日に1度浚渫を行う計画とします。 加えて、伐採が済んだところから浸食防止材を設置することで、工事中から発生源での土砂流出防止対策を行います。 <p>【供用後】</p> <ul style="list-style-type: none"> 排水塔をコンクリート製とし、オリフィスを複数個設置することで調整池内の湛水面積を大きくし、浮流土砂の沈降を促した計画とします。 流量が少ないうちは、天然素材フィルターを透過して流下させることで、濁水の発生を抑えます。
1	20	水質	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 4-5-14：ここでは土砂に関して濁水のみを対象としているが、侵食土砂量についての記述が全くない。侵食土砂量の予測は、開発の影響予測で必要不可欠なものであり、濁水で代用できるものではない。なぜ予測しないのか。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> パネル設置エリアは、原則的に土地造成及び抜根は行いません。さらに裸地の抑制、台風などが予想される場合は一時的に工事を休止するなどの保全対策を行います。また、原則的に土地造成及び抜根を行わない事、工事中は土砂流出防止用の仮沈砂池と浸食防止材を設置する予定です。そのため、下流域に流出する侵食土砂量は極めて少ないと考えられるため、予測は行いませんでした。
部1	3	水質	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 重金属や分解の遅い有機物質の地下への流出は絶対避けなければならないという意見に対して、地下水の流動に関する阻害要因はないという見解だが、大気中の有害物質を葉や幹が附着させる森林の緩衝能力がなくなるので、全く影響がないとは言えないはずである。 	<ul style="list-style-type: none"> 森林が有害物質を捕捉しているメカニズムや、森林を伐採することで地下水がどれくらい汚染されるかということについては、不勉強で分からないのですが、かつてここは草地だったということがあり、現在も土地利用の形態を考えると周辺にいろんな開発や土地利用があったりするような状況ですので、そういったことも総合的に考えて判断する必要があると考えております。
1	21	水象 地形・地質	富樫委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 水象の調査範囲は知事意見を踏まえて周辺の水源エリアまで含めたことだが、地形・地質は事業エリアとその周辺が調査範囲となっている。地形・地質については広域的な調査はしていないということによりか。 環境影響評価技術指針マニュアルでは、水象の予測評価においても地形・地質は非常に重要であり、内容がきちんに対応できるように記載されている。地形・地質項目は土地の安定性だけのためのものではない。 広い範囲の地形・地質も調査されていることだが、どの程度の調査をされているか。 	<ul style="list-style-type: none"> 土地の安定性に対する地形・地質をこの範囲で調査しております。調整池の掘削及び管理用道路の設置が土地の安定性に対する主な影響要因になります。 スライド55番には調査範囲に加えて調査項目も示しており、水文地形・地質状況をあげております。先ほど申しましたのは、調整池など工作物の設置に当たっての土地の安定性の検討範囲になりますが、水象の調査に当たっての周辺の地質や地形の状況は、流域の広い範囲で検討しております。 文献をベースにし、それをもとに現地を確認しております。特に湧水地点がどういう地質でできているか、どの層序に当たるのか確認を行っております。細かいルートマップを作って踏査したわけではなく、水が湧いている所や沢水の源頭部分などを確認しております。
部1	4	水象 地形・地質	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今回の調査は水源も含めると非常に広い範囲が調査対象範囲になっているが、地形・地質の調査にかけた日数は延べ何日か。 調査日数というのは目安であって本質的な話ではないが、熊井(1975)の調査では、信州大学の理学部の教官と学生が地質の調査の為に延べ150日現地の調査に入っている。既存の熊井先生の文献と食い違う結果はないという説明があったが、現地の地質状況に関しては既存文献がベースとなっており、それに新しいデータを付け加えて最終的な評価を行っているという理解でよいか。 	<ul style="list-style-type: none"> 1回の調査で2,3人のパーティーが2,3組入り、一週間くらいかけて調査しております。その際は、地形・地質を見るのと同時に、水の流量、簡易水質、代表地点の採水と一緒にっており、それを3回ほど実施しています。準備書の4-6-1ページに調査内容を、4-6-9ページに調査時期を掲載しております。 その御理解で結構でございます。

1	22	水象	富樫委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各水源、湧水の涵養域を示した図と、広域の模式図としての断面図が示されているが、断面を書くに当たっての根拠がどこにあるか示されていないので、模式図がどの程度正しいのかが非常に分かりにくい。これらの図面はオリジナルと引用のどちらか。 オリジナルのデータということであれば、既存の調査資料や過去の研究の見解と異なる点については、どちらが学術的に正しいか明らかにしなければいけない。もし違う所があるのであれば、どういう根拠に基づいて違うのかを今後の審議で資料として提出いただきたい。 <p>(片谷委員長)</p> <ul style="list-style-type: none"> 次回、間に合わなければ次々回に、既存文献の結果と今回の調査結果を対比できる資料を用意していただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 結果を分かりやすく模式にしたものですので、オリジナルになります。また、断面図についても説明のために模式的に組み合わせただけですので、地下の地質のどこを水が通っているかを示したものではありません。 今日はダイジェスト版で示しておりますが、準備書の中にはデータが載っており、今回調査したデータに基づいて推定を行っております。もちろんこの地域の既存論文や研究成果についても確認をしております、そういったものをベースにしながら調査を実施しております。 検討いたします。 <p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>地質図・地質断面図は、準備書に引用した「諏訪の自然史、地質編、諏訪教育委員会（1975）及び付図 諏訪地質図七万五千分の一」、及び「5万分の1地質図幅 諏訪 及び同説明書、地質調査所（1953）」を基に作成したものです。その際の透水性の根拠については「熊井久雄（1982）八ヶ岳火山山麓の水理地質学的研究」を参考にしています。水理地質構造は、事業計画地周辺域について広域に示した文献がないため、以下に示す既往文献や成果及び現地確認踏査結果を参考に解析しました。</p> <p>結果は、わかりやすく広域の模式断面図として示しました。この模式断面図は既往文献や成果と異なる結果や見解があるために作成したのではなく、事業計画地を含む広域の断面を示すため、既往文献や成果を集約し作成しました。このため、基本的には既往資料の見解と異なるものがあるというわけではありません。</p> <p>P4-6-51（図4-6-33）水循環系の模式図については、同位体分析の結果を基に涵養域の高さを模式的に示したもので、今回の分析結果から考察しました。同位体分析結果は、準備書P4-6-44～51に示しています。別添、対比表を参照ください。</p> <p><主な引用・参考文献></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 沢村孝之助・大和栄次郎（1953）5万分の1地質図幅「諏訪」及び同説明書、地質調査所。 2 諏訪の自然誌・地質編編集委員会（1975）諏訪の自然誌 地質編、諏訪教育委員会、531pp. 3 諏訪の自然誌・地質編編集委員会（1975）「諏訪の自然誌・地質編」付図 諏訪地質図七万五千分の一、諏訪教育委員会。 4 長野県地質図活用普及事業研究会編（2015）長野県デジタル地質図2015（DVD版）、長野県。 5 産業技術総合研究所地質調査総合センターウェブサイト「20万分の1日本シームレス地質図」（2018.5確認） 6 熊井久雄（1982）八ヶ岳火山山麓の水理地質学的研究、信州大学理学部紀要、第17号、p31-115。 7 熊井久雄（1975）大清水湧水の湧出機構について、信州大学地質学教室 8 創価学会霧ヶ峰研修道場（1988）創価学会霧ヶ峰研修道場新築工事に伴うさく井工事 図2.1さく井柱状図。 9 諏訪市水道温泉課資料（2018年聞き取り）新南澤水源さく井設計概要図。
部1	5	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 熊井（1975）では、地質構造が溶岩層を主とする主要な帯水層が南東に向かって傾斜し、緩くたわんだ盆状構造を持っており、それに沿った形で地下水が流動していると述べているが、この非常に大事な結論について、準備書の中では触れられていない。大局的な地質構造に基づいて流れを想定した結論に全く触れず、熊井が示した地質図なり地質区分だけを引用し、自分たちで集めた同位体分析などの新しいデータだけを付けて、熊井達が想定した地下水の流れと違う流れが述べられているが、議論としてはフェアではないのではないかと。 <p>(鈴木部会長)</p> <ul style="list-style-type: none"> 事業計画地で浸透した水はどこに行くと考えているか。 そうすると、南東方向の傾斜ということは全く無視される。それを否定する事実があるかということも富樫委員は問われている。 	<ul style="list-style-type: none"> 地下深部の溶岩の分布は、根本的に良く分からない部分もあり、地質的な解釈は当時の地質図と現在の地質図を比べてみても根本的な大きな違いは見受けられませんでした。一方で、出ている水がどこから供給されたかという同位体水文学の部分では、1975年当時に比べると精度も解釈もかなり出来るようになり、官原先生も使われています。盆状構造といったことは別として、溶岩層の中を地下水が流れるという熊井先生の地質をベースとし、それと同位体分析の結果とを当てはめて考えると、どう解釈できるかということに着目しました。 環境影響評価ですので、霧ヶ峰の南麓の地下水の流動を全て明らかにすることを目的とするのではなく、北大塩大清水水源や南沢水源といった下流での水利用に対してどういう影響があるかということ予測するための調査を実施いたしました。 事業実施区域の水は、北大塩大清水水源ではなく、角間川の下流に向かって地下水流動しているのではないかと予測しております。

部1	6	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・熊井が示した地質構造を考えると、帯水層が南東に向かっているのではないかとの問いに、明確な根拠もなしに、それを否定して角間川の方に流れているという見解では回答になっていない。否定できる確実な科学的根拠と論理的な説明をすること。 	<p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既往資料を基に想定される帯水層の分布について、部1-7の見解に示しました。 ・準備書作成にあたり、地質分布・帯水層分布については熊井先生の論文も含めて既往資料の内容を否定する様な記載は行っていません。 <p>(資料1-1 1～5ページ)</p>
部1	7	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既存の文献を引用する場合は、その文献で言おうとしたことをそのまま忠実に引用しなければならず、都合のいいところだけ引用してはならない。熊井（1975）では、大清水水源には計画地を含む方からも涵養があり、それが流動してきていると思われるという見解が述べられている。 ・アセスの調査なので学術的に完璧に何かを明らかにしなければということではない。しかし、もし既存文献の見解と相違があるのであれば、それを反証する論拠を示した上で議論をする必要がある。 	<p>・大清水水源の利用に対して、今回の計画が影響するかという観点から、大清水水源の水がどこから来ているのかということに着目して調査を行いました。</p> <p>・下流に花こう岩の地質構造があったりするので、そういうことも関係しているのかもしれませんが、南東方向に地下水の流動があったとして、事業地に降った雨がどこにどう流れているかを探るのは非常に困難であると感じています。</p> <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <p>・熊井先生の論文「大清水水源の湧出機構について（1975年3月）」には、「下部塩嶺類層（準備書内では“古期火山岩類（EnaおよびEnb）”として対比）」は、・・・東北～南西方向の走向を有し、南側へ急傾斜している。水理地質学的には、これを不整合におお上層部塩嶺類層（準備書内では“第Ⅰ期霧ヶ峰火山岩類（KⅠa、KⅠb）および第Ⅱ期霧ヶ峰火山岩類（KⅡa～KⅡc）”として対比）の熔岩類に対して不透水層の基盤を形成している。」</p> <p>「上部塩嶺類層は、下部塩嶺類層およびそれより古い地層（花崗岩・塩基性緑色火山岩類）を不整合におおって調査地域全域に広く分布し、そのキレツ内に多量の地下水を含有する。・・・全体の構造は、檜沢（前島川のこと）を中心とした凹地を埋めたように分布し、各地層ごとに何回かの埋め立てが行われたことを示している。・・・これらのうち、最も大規模な熔岩類は福沢山両輝石安山岩（いわゆる鉄平石）（準備書ではKⅠaとして対比）とこれの上位に不整合に広がる、相の倉沢角閃石安山岩（準備書ではKⅠbより上位層として対比）で前者は西で厚く後者は東で厚く発達する。」と記載されています。</p> <p>・当準備書内においても、霧ヶ峰の南西側に位置する対象事業実施区域の下部には上記の福沢山両輝石安山岩の相当層（KⅠa層）が分布し、事業地の東縁付近で上位層である相の倉沢角閃石安山岩の相当層（KⅠb層）が分布するとして解釈しています。</p> <p>・一方、北大塩大清水水源の湧水は上位層である、相の倉沢角閃石安山岩の相当層（KⅠb層）中から湧出する地下水であると解釈しています。</p> <p>・ただし、熊井先生が論文に記されている「大清水水源には計画地を含む方からも涵養があり、それが流動してきていると思われる」という見解につきましては、茅野横河川流域での水収支調査（流量観測）を実施されていない段階で、可能性について述べられていることと解釈しています。</p> <p>・準備書作成にあたっては茅野横河川の調査も実施した上で上位のKⅠb層は対象事業実施区域に湧出する湧水の帯水層として判断し、対象事業実施区域で涵養された地下水は下位のKⅠa層を帯水層として（角間川流域の南東側に向かって）流動しているものと判断しています。（資料1-1 1～5ページ）</p>
部1	8	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業実施区域に降った雨がどこに行っているか分からないのであれば、下流水源に対する影響がないとは言えないのではないか。下流水源の水に事業実施区域に降った雨が全く含まれないという証拠はあるのか。 	<p>・北大塩大清水水源の水は、同位体から見れば事業区域に出ている水よりも軽い水です。軽い水に重い水が若干入っており、全体として軽い水になっている可能性がありますので、全く含まれないということではなく、ウエイトとしては上流域の涵養量がかなり多いと書いております。</p> <p>・予測に一定の限界があるということは理解していますので、事後調査ということで、準備書6-14、15ページに水象に関してモニタリング調査をしていくことを記載しております。事業地の中の湿地の水位や下流の流量、周辺の井戸や湧水の流量のモニタリングを、工事前の影響のない状態から、工事中、工事後にわたって連続的に行い、影響がないかチェックしていくことを計画しています。</p>
部1	9	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・標高ごと、季節ごとには降水の同位体を計測していないため、湧水や渓流水の涵養標高を考察することは、そもそも不可能である。 	<p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・降水の水素・酸素同位体分析は実施できておりません。 ・そのため、本検討では、湿地に見られる湧水分布と地質との関係、主成分分析結果、湿地水の水温観測結果等から、C、D湿地の湧水が調査地内で最も狭い（限られた涵養域として）流動範囲であるとの判断し、周辺に分布する湧水の涵養域がC、D湿地（対象事業実施区域）の湧水の涵養域に比べて高いのか、同程度か、また低いのかという検討を行いました。 ・その上で、C、D湿地の湧水地点の標高（平均標高1,350m）を涵養標高とした場合に、それぞれの湧水の涵養標高の平均がどこなのか、地質分布（帯水層分布）を考慮したときにどのあたりが涵養域として想定されるのかを可能性として示したものです。 ・既往論文※によれば、「降雨浸透水の水素・酸素同位体比は浸透過程で生じる蒸発によって降水とは異なる値を示すため、降水の同位体比を浸透水の値としてそのまま用いることはできない。流域外および河川などからの涵養がなく、かつ人為的な地下水涵養源の影響がないと考えられる地点の湧水は流域の降水浸透水そのものと見なし得る。」とあり、このことを参考としてC、D湿地の涵養域を調査地の湧水の涵養標高の基準として検討を行いました。 ・また、その際の高度降下については、『水文学』（筑波大学水文学研究室著、2009、p213）に「平均的には$\delta 180$で0.2‰/100m程度の割合でδ値は減少する」との記載を参考としました。 <p>(資料1-1 8～14ページ)</p> <p>※) 参考文献 稲村明彦・安原正也（2008）都市域における浅層地下水涵養源の同位体水文学的考察、日本水文学会誌、38-2、p55-62 (資料1-1 13ページ)</p>

部1	10	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同位体水文学では涵養域を示す答えしか出ず、途中の経過は無視される。 ・検討すべきは、事業を行う場所からの浸透水が湧水に影響があるかないかということであり、その場合には水象に係わる流動解明がどうしても必要になってくる。それを全く無視してどこで涵養されたものから出てくるということだけでは、事業が湧水に対して影響がないとは評価できない。どこで涵養してどこを流れてくるかということを議論しなければならない。 <p>【第1回水象部会追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・変更が小さいため水象に係わる流動解明は不要とする根拠は、事業者の希望的概念であり非科学的である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・帯水層をいじるのであれば確かに問題がありますが、基本的に今回の事業は樹木の伐採等で涵養量が変わるだけですので、今の大きな地下水流動そのものをいじるわけではありません。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地下水の流動については、同位体の分析結果のみで判断しているわけではありません。 ・既存の地質文献による地質の分布状況や水収支調査（湧水比流量）そして水質分析（主成分分析、水素・酸素同位体分析）の結果をもとに総合的に予測を行っています。 ・変更が小さいために流動解明を不要とっているわけではありません。既往文献による地質（帯水層）分布の把握および準備書に示した水象の調査結果から地下水の流動を示し、その状況下で工事を実施した場合にどのような懸念事項が考えられるか整理した上で、その懸念に対する影響予測を行っています。 <p>（資料1-1 全体）</p>
部1	11	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地下水に関しては影響によって環境が変わった場合に元に戻すことが非常に困難である。事前にどこまで影響予測できるかが大事で、良く分からないから事後にモニタリングするでは環境影響評価にならない。 ・どこまで明らかにすればよいかは難しい問題だが、少なくとも過去に調査された出された見解と違う見解を出すのであれば、それに見合うだけの証拠を出す必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・熊井先生は横河川から水が来ている可能性があるということで、メインは検沢等と書かれています。また、当時の調査では横河川の流量は測られておらず、比流量から見ても、横河川流域の上流域下流域の比流量と検沢の比流量は、横河川の涵養量を入れなくてもバランスが合いま。確かにゼロとは言いきれませんが、オーダー的な収支から見れば、基本的には横河川からの涵養は非常に少ないのではないかと解釈しており、水質分析も踏まえて解析いたしました。 ・器は重要であり、器のことを否定できるだけの調査はしていませんが、少なくとも収支と水質から見た上では、涵養量は非常に少ないのではないかとということで結論付け、ゼロではない可能性があるためモニタリングで自記観測することとしました。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部会において回答したとおり、現地調査結果から周辺に対する実害影響はほぼ発生しないと予測していますが、現在の科学技術の中では100%変化が発生しないとは言いきれません。 ・そのことを踏まえて、「影響は極めて小さい」や影響の範囲や予測の不確実性を伴う」という言葉を用いて記載し、そのことを確認することも含めてモニタリング観測を計画しています。決して良くわからないからモニタリングを実施することではなく、工事中～工事後に関しては予測結果を確認するためのモニタリングを行い、影響評価を行っていきたいと考えております。 ・地質状況と現在の湧水分布の説明がつけられること、熊井先生の調査では実施されていない茅野横河川流域を含めた水収支調査の実施・同位体分析等の実施しながら、大局的には過去の結果と同様の見解を示していることを確認し、今回の事業計画に伴う影響について評価を行いました。
部1	12	水象	梅崎委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・涵養域について、準備書の中での図面等による記載と小坂先生の意見との相違点及び事業者の見解を分かりやすく説明していただきたい。 <p>（鈴木部会長）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書の図面と準備書提出前の住民説明会の図面は基本的には変わっていないと思われるがどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-50, 51ページに概念図を示しておりますが、図の解釈としてダイレクトにここだけから水が来ているという捉え方になると少し誤解が生じてしまうので、解釈に当たっては注意が必要な図です。例えば、スライド167番には水源への影響についての意見がありますが、こういったものに対するご批判を受けているところかなと思います。細かいデータや根拠がどこにあるのかということについては、調査している段階での住民説明のパワーポイント資料にはありませんでしたが、準備書の中には記載しております。 ・解釈としては大きく変わっていないですが、根拠や細かいデータを示していないといったご批判については、準備書の中で示しております。意見書をいただいた段階ではそういった細かいデータをお示していませんでしたので、そういったお話しがあったのかなと思います。
部1	13	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-50ページの地下水涵養域図が基本的な見解かと思うが、この図は非常に不自然である。霧ヶ峰の中心部のなだらかな場所である計画地が、周辺のどの水源の涵養域にも当たっておらず、この広大な場所でも浸透した水がどこに行くのか分からないとしながら、下流水源の涵養域にはあたらぬとする結論はおかしい。最初から結論ありきではという誤解を招きかねない図であると思う。 <ul style="list-style-type: none"> ・今の説明は自分で出している図を自分で否定している。できれば出したくなかったとか、実はどういう解釈をすればいいか非常に不確実性があるという図であれば、水源と関係ないと思わせる図は誤解を招きだけである。少なくとも準備書4-6-50にあるこの図は、計画地は主要な水源のどこの涵養域にもなっていないということを説明する図になっており、今の話とはだいぶ違う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同位体は基本的に相対的な話であり、その部分よりも高いか低いかに示しています。具体的な標高は出ませんので、調査の段階では本当は標高を出したくありませんでした。宮原先生の論文では降水量から標高を求めています。その論文の情報を適用するとつじつまが合わないケースがあり、例えばC,D湿地は実際の標高より低い所で湧出していることとなります。この図は我々のとったデータをベースに、C,D湿地を基準標高にして表現したものであり、水が全くないような絵になってくるというのは、あくまでもデータに基づいたものです。評価としては南沢水源、角間川の方に流動している水が多分にありますということを準備書に記載しております。 ・北大塩大清水水源についても南沢水源についても、事業地は主要な涵養域になっていないという解釈をしており、北大塩大清水水源は事業実施区域より標高の高いエリアの山体に降った雨が主な涵養域になっているのではないかと推定しています。南沢水源については、涵養域にかかっている可能性があるデータからは解釈できましたので、事業地に降った雨が全て南沢水源に含まれ、さらに降った雨の9割が浸透せずに流出するという極端なケースを想定して、南沢水源の今の取水量に対して影響があるか検討しました。その結果、オーダー的に全然取水に影響がありませんでしたので、現在の取水に対する影響は想定されず、極めて影響は小さいという結果を記載しております。

部1	14	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業地に降った雨はどこに行くのか。先ほどから議論しているように水質は混ざるので、水質形成過程においてはさまざまな要因や可能性が含まれる。地下水流動経路の推定において、準備書に示された水質の特徴は（事業者によって選ばれた）一つの推論の傍証であって、特定の推論の妥当性を決定づけるものではない。 ・地下水の移動経路を予測するためには、地下水の流れを規定する地質構造と、地下水面の形状等ポテンシャル面の分布を知ることが基本である。地質構造と地下水面のポテンシャルが決まれば、水の流れを解析できるはずである。なぜそこを調査しようとするのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少なくとも湧水として出てきている水であれば、どこから来たのかは追跡してはいけますが、特定の地面に降った雨がどこに行ってしまうのかを追いかけていくのは極めて困難であると考えています。それはこの地域だけでなく日本中どこでも、どこかに降った雨がどこに行ったのか追いかけていくのは極めて難しい問題です。 ・言われることはごもっともですが、これだけ断層構造が多く発達している大きな山岳地域のポテンシャルに関しましては、非常に難しい問題ではないかと思えます。浸透した地下水は角間川方向に行っているということは分かっても、それがどこに行っているのか、また、下のほうに出ている水にどのくらい混ざっているのかということのアセスの中で解釈するのは非常に難しい問題ではないかと思えます。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水文地質分布状況や水収支調査結果から地下水としての流出域・涵養域としての検討を行い、どの帯水層を流動しうるのかについて検討いたしました。 ・地質状況と現在の湧水分布の説明がつけられること、茅野横河川流域を含めた水収支調査の実施・同位体分析等の実施により、大局的に地下水の流動状況についてその涵養域から流動機構について示しました。（資料1-1 全体）
部1	15	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-113ページに水循環系概念図、4-6-50ページに各水源の主な推定涵養域概念図、4-6-51ページに霧ヶ峰周辺の水循環系の模式図があるが、これらは明らかに北大塩大清水水源の水は途中の水が混じらずに踊り場湿原周辺の水がそのまま来ているという思想に固まっている。これは模式図ではなく事業者の予想図であり、根拠が水素・酸素同位体の値に寄りかかっており、考えのもとになるデータが非常に不足しているのではないのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おっしゃるとおり同位体を一つの根拠としておりますが、それに加えて、比流量による検討も行っています。 ・準備書4-6-36ページの図は、比流量を湧水期に測った基底流量を示したのになります。上の図は沢に流れている実測量で比流量を示したのですが、両サイドに比べて、真ん中の椛沢川と前島川の比流量が非常に小さいです。一方、下の図は椛沢川と前島川に北大塩の湧水量を加味した比流量を示していますが、こちらでは、19.9になって周りと比較的行き渡り取れた比流量になります。また、例えば椛沢川は9.7という全体流域になっていますが、上流域では湧水期にはほぼゼロの状況です。そういった収支的なものも踏まえて、先ほどの流動系の模式図を作りました。
部1	16	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湧水は上流域のどこかに降った雨が集まっているので、その間の経路についてきちんと論理的に説明できなければ、保全対象への影響の有無は分からない。地下水は涵養する所と流出する所、それからその間を繋ぐ経路の3つが分からなければ議論にならない。完璧に明らかにすることは無理でも、できる限りそこを明らかにし、皆さんに納得していただくことは事業者としての責任である。環境影響評価だから途中は分からなくてもしょうがないということにはならない。 ・準備書4-6-104ページの断面図は、「高標高域にあるとされる水源涵養域と湧水地点の断面で水が流れている」という事業者が考えているイメージにすぎず、前ページの解釈図の説明でしかない。 ・解析に必要な情報は、計画地と水源との関係であり、計画地と水源との間の地質がどうなっていて、地下水がどうなっているかということをもっと知りたい。それには、計画地と水源、湧水地点を結んだ断面を作る必要がある。既存資料もあり作れないはずはないので、計画地と各水源を結んだ断面図を次回以降に示していただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的なお話をいただきありがとうございます。準備書4-6-114ページの図では南沢水源の方向に断面を作っているのですが、北大塩などの各水源についてもどんな概念図になるかを示すということで承知しました。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湧水の流動の模式図作成（地下水の概略メカニズムの検討）にあたっては、まず既往の地質分布状況の資料や湧水分布（地下水の露頭）の確認を行い、地下水の帯水層分布を模式的に整理しました。（資料1-1 1,3～5ページ） ・その上で、裏付けとなるデータの収集（水収支調査（流量調査）、水質分析（主成分分析や水素・酸素同位体分析））を行いました。（資料1-1 2,6～12ページ） ・4-6-104に示す模式断面図は、上記の既往資料、現地の実体、観測結果を総合的に想定される地下水の流れについて検討し、地下水の流れを説明するために必要な断面図を作成した上で模式図としたものです。（資料1-1 16～17ページ） ・事業地から北大塩大清水水源を結ぶ断面については、地質構造的にもこの方向には主たる地下水流動は考えづらいとの判断で作成しておりますでしたが、ご指摘の通り、計画地と水源との関係を示すうえでは非常に重要と考えますので、事業地と周辺の帯水層分布の繋がりの有無について説明するための断面図としてD-D'断面やE-E'断面として作成いたしました。（資料1-1 5ページ）
部1	17	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開発地の森林を伐採して太陽光パネルを設置したらどうなるかを影響評価しているのであり、踊り場湿原と大清水水源だけの議論では不十分である。 ・地下水では三次元流動のモデルがよく使われており、地質の条件、浸透係数が分かれば簡単に作れる。そういったものをもとにして、この地域からは大清水や他の水源にも影響はないと議論するならば分かるが、開発地の所の議論が地下水については全くない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小さいエリアであればある程度の三次元モデルは出来ませんが、これだけの広い範囲の境界条件などを考えると、地下水の流れを再現するためのデータを調査して三次元モデルを作ることは非常に難しく、モデルの正確性について、もっと先生方から議論が出てくると考えました。

部1	18	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> この地域には熊井（1975）の文献があり、通常は開発予定地近傍でこれほど詳しい水理地質条件の既存資料があるケースは稀である。地質状況、帯水層、水理定数の代表値もある程度分かっている、不足するデータは計画地の地質と地下水水位だけである。その基本の調査も実施せずデータがないから詳しいシミュレーションが出来ないというのは怠慢といつてよい。準三次元浸透流解析でもいいのでシミュレーションを行うべきである。 基本的には、両サイドが川で区切られており、シミュレーションしやすい場所である。境界条件は主要な川の水位や、上流の範囲には車山の周辺の稜線までを含めればよい。 	<ul style="list-style-type: none"> 再現しようと思えば、準三次元でも霧ヶ峰の南斜面だけでなく、向こうからの全体の水収支が必要になってくると思います。 途中には断層やそれによってできた湿原があり、そこからの涵養量は推定の値を考えないといけません。他にも山のどこの降水量を使うのかや蒸発量などの色々な条件がはいってきますので、これをモデル化するの是非常に難しく、確実に実測データのあるモデルということを考えました。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地形的な流動を超えた地下水流動や、限られた帯水層から湧水等が多く分布する本事業対象地域においては、地下水流動を再現するモデルの作成は（準三次元モデルではなく）三次元モデルが必要となると考えられます。 また、流域境界を横切るような地下水の流れが想定される場所では、河川自体を境界条件とすることには疑問があり、三次元シミュレーションによる地下水流動解析を行うための境界条件の設定には不明点が多々あります。 広域の地下水流動を検討するための三次元シミュレーションを実施するとすれば、部会での回答でも述べた通り、霧ヶ峰周辺が火山岩の分布地域であるという特性上、事業地内のみボーリング（地質分布、地下水位、透水係数）のみでは山体全体の流動について評価することは困難であると考えています。
部1	19	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 開発の影響があるかないかを議論しているにも関わらず開発地そのものの地質データが全くないことが問題であり、それが無いと影響がないのかあるのか不明である。ボーリングデータがどのくらいあれば事業予定地内の地質条件が解析できるか判断できないが、通常ボーリング調査は実施するものではないか。 <p>【第1回水象部会追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 地表面から浸透した水が、どういう経路を通過してどこに流れていくのかを議論することは、事業計画地内の地下構造物建設の有無等により判断される事項ではなく、地下水の流れを検討するためには、当然地下の状況を把握する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 地下構造物を作る、トンネルを作る、地下水の取水を行うといった事業であれば、地下がどうなっているのかというのは非常に大きな議論の的になると思います。ただ、今回は調整池の掘削はありますが、ほとんど伐採のみの地表面の開発ですので、事業の内容から見て調査を設計しています。事業によって、こういう事業であればこういう調査はここまでといった標準的なものが示されていますので、そういうものに照らして考えたいと思います。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 広域な地質や地下水流動を把握するための大深度のボーリングは実施していませんが、既往の地質資料や湧水分布の実態から各湧水の帯水層について検討し、比流量分布の実態（水収支調査結果）から対象事業実施区域の湧水は北大塩大清水水源の帯水層と同じ第1期上部霧ヶ峰火山岩類（K I b層）より上位層を帯水層とする流出域にあたることを示しています。（資料1-1 1～7ページ） また、既往地質資料によれば、対象事業実施区域には北大塩大清水水源の帯水層より下位の第1期下部霧ヶ峰火山岩類（K I a層）が南西方向に分布することから、事業区域から地下水浸透した地下水はこれらの層を帯水層として角間川流域の方向に流動することを示しています。（資料1-1 1,4ページ） 上記のような地下水の流動状況について考察を行ったうえで、本事業の特質性（地表面付近のごく浅い深度の改変）を考慮した場合、どういった影響が考えられるのかを考えた上で第1回の部会において説明しました。
部1	20	水象	梅崎委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 計画地が涵養地に当たっていないということを前提とした議論が進んでいるので、まずそのことを示す必要があるが、標高と同位体だけでいいのかわどかという議論があり、先ほど富樫委員が言われたように、断面を書いた時に影響がないという程度程度のモデルは出来ないといけません。そのためには水が地下深く浸透しているかどうかを解明するというのが一つの考え方であり、計画地内でのボーリングや地下水位、流向流速というデータは必要ではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> 持ち帰らせていただいて、検討させていただきたいと思います。どういうやり方をすればよいかなどいろんな議論があると思いますので、またそれは教えていただきたいと思います。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象事業実施区域の周辺の地質構造については、これまでに作成したA～C断面に加え、D、E断面を用いて、帯水層分布や水収支調査・水質分析結果を基に対象事業実施区域が北大塩大清水水源の涵養域として考え難いとの検討結果を示しました。（資料1-1 5,18ページ） モデル検討を行ったわけではありませんが、追加として地質断面図（2断面）を新たに作成し、対象事業実施区域より浸透した地下水がどの帯水層を通過（南沢水源方向に）流動しているかという見解を示しました。（資料1-1 5ページ 17ページ） さらに、ご指摘を受け計画地内での追加的なボーリング調査を計画しました。（資料1-2）
2	1	水象	富樫委員	<p>【第2回追加意見】</p> <p>事業地内に成立している湿原について、計画地の地質の不均質性を考慮せず、水質データと水収支計算のみでは、湿原が現在の限られた場所に偏している理由を説明できません。その理由があって初めて計算結果が保全対象の湿原の実態を表しているかどうか判断できます。予測評価の妥当性についても同様です。湿原には多様性があり、個々の湿原によって成立理由も変わります。水収支解析では、湿原成立の固有のメカニズムを考慮した水循環モデルの想定があり、「モデル」と「実測値を入れた収支解析」との整合性が確かめられることによって計算結果が意味をもちます。貴重な湿原の保護のためには、湿原の水環境を規定する固有のメカニズムへの理解を欠かすことはできません。ボーリング調査結果や現地地質調査結果をもとに、各湿原と尾根部を通る地質断面図を示し、個々の湿原内で特異的に高い地下水水位が維持されている具体的なメカニズムを示すこと。</p>	<p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象事業実施区域に分布する湿地の周辺には湧水が多数分布しています（準備書P4-6-20～湿地実態調査結果参照）。 これらの湿地は広域の既往地質分布と比較すれば第1期上部霧ヶ峰火山岩類（K I b層）～第2期中部霧ヶ峰火山岩類（K II b層）の境界部付近に位置しています。湧水直下に位置する湿地は、比較的透水性の劣る下位の第1期下部霧ヶ峰火山岩類（K I a層）を受け皿として、地形的に勾配の緩やかな箇所形成しているものと判断しています。（資料1-1 1,2ページ） 本準備書では、湿地水の起源となる湧水の湧水量の変化を把握するために、湿地の直下流で自記観測を行いました。 なお、湿地の水の影響予測評価としては、その流域全体の地下水状況がどのように変化するかを検討することを目的として、湿地下流で実施した自記観測結果を基にタンクモデルによる流量再現を行うとともに、工事後の影響予測検討を行いました。 対象事業実施区域内の調査ボーリングについては、調整池の設計を行う上で必要な堰堤体部の安定性については調査を実施しておりますが、その周辺（調整池と湿地の間）の地質分布状況については行っておりませんでしたので、その間の帯水層分布等を把握するためにも、追加的なボーリング調査を計画しました。（追加の調査ボーリング地点については、別紙提案図面参照）（資料1-2）

1	23	水象	鈴木委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料2-2の19ページのヘキサダイアグラムによる水質区分の分析結果について、湿地と湧水で形が全く違うので湿地が起源ではないという説明があったが、地下水になれば進化が起こるので、湿原と湧水で形が違うのは当然のことであり、それをもとに起源が違うとは言えない。特にナトリウムは地下を流れば流れるほど濃度が高くなるので、ナトリウムを用いた議論は不可能である。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>湿地と湧水でヘキサダイアグラムの形が違う事を理由に起源が異なるという判断はしておりません。むしろ、トリリニアダイアグラムでは同じ1型(CaHCO₃)に分類されるものとして整理しています(準備書P4-6-39, 図4-6-25)。</p> <p>湿地水と湧水の違いについては、湿地水は溶存成分が少なく滞留時間の短い水、周辺の水源湧水は溶存成分が多く滞留時間の長い水という解釈を行い、その傾向はシリカ濃度とナトリウムイオン濃度の相関性にも表れていることとして整理しています(準備書P4-6-41, 図4-6-27~28)。</p> <p>スライドによる説明資料のみに記載の酒造会社の井戸のデータ(5軒中2軒で実施)については、個人データである理由から準備書には示しておりませんが、湿地水や湧水と比較して霧ヶ峰南麓斜面に分布する湧水の水質とは明らかに異なる組成を示していることから、地下水流動系が異なるものと判断して、説明会等ではそのような説明をしています。</p> <p>なお、南沢水源は100m以上の深井戸にも関わらず、浅層地下水に分類される(ただし湿地水に比べると滞留時間は長い)ことから、湿地水や湧水は一連の流れの中の地下水に含まれるが、調査した酒造用井戸は浅井戸にも関わらず深層地下水に分類されることから異なる帯水層を示している可能性があるものと考えています。</p>
部1	21	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> スライド157番で熊井先生も今回の調査結果もカルシウムイオンが非常に大きいので流路延長、流動時間が長いと御説明されているが、長くても数年でないかと思うがいかがか。 熊井先生のカルシウム濃度が大きいから流路が長いという熊井先生の当時の見解は今の学説とは異なるので、それと同じように並記すると誤解が生じるのではないか。 	<p>・トリチウムなどによる年代測定はしておりません。ただし、大清水水源や南沢水源とC,D湿地を比べると、主成分のパターンはあまり変わっていませんが、シリカ濃度が非常に多くなっています。また、ナトリウムは滞留時間が長くなればカルシウムと置き換わって出てきますが、ナトリウムイオンとシリカ濃度が非常によい相関を示し、シリカが多くなるとナトリウムも多くなっています。何十年、何百年ということ言っているのではなく、基本的には降った雨がすぐ出てくるのではなく、ある程度の時間が経過して流れているものだという事です。</p> <p>・先生の当時の見解をそのまま示したもので、誤解を招くような記載になっておりました。</p> <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> スライド157番(第1回水象部会資料)は、熊井先生の論文の内容と準備書の見解を比較するために、比較資料として先生の当時の見解(スライド内の左欄に記載)をそのまま示した上で、当準備書の内容(スライド内の右欄に記載)と比較してスライドにまとめたものです。 準備書の中ではこれらの解釈を取り上げている比較検討は行っておらず、準備書で「カルシウム濃度が大きいから流路が長い」といった見解は示していません。 <p>(資料1-1 12ページ)</p>
1	24	水象	鈴木委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 資料2-1の60番の酸素-水素同位体比のデルタダイアグラムについて、値が小さい方が標高が高いというのはよいが、降水を1年間あるいは数年間計測し、季節変化まで明らかにした上で議論する必要がある。どうしてこの数字がここに当てはまるのか根拠が分からない。 真冬の測定結果が無いので、各水源ごとの季節変化が見えづらい。また、安定的な地下水であれば季節変化がないはずだが、季節変化が見られるので表層の水が入っていると考えられ、今までの説明では不十分である。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>本準備書作成にあたっては、事業地内で限られた流動による水質であると判断可能なC湿地・D湿地の湧水を基準(CD湿地の湧水の同位体比が1,350m付近の標高で涵養された降水であると仮定)として涵養域を推定しています(準備書P4-6-44~45記載)。</p> <p>ただし、降雨の同位体分析についてご指摘をいただきましたので、分析を追加して実施いたします。</p> <p>なお、あくまでも標高は、上記の仮定条件のもとで目安として示したものであり、分析結果は湧水等の供給源が事業地よりも高いか低いという考察をしています。</p> <p>また、湧水・水源の同位体の分析は基本的に8月(夏季)、11月(晩秋季)、5月(春季(融雪期)、一部地点実施)に実施しておりますが、一部の地点では採水が可能であった時期に限った分析となっております。本調査で可能であった分析試料を基に判断すれば、若干の幅をもった分析結果を示しておりますが、全体的には各時期とも同様の傾向を示していると判断しました。</p>
部1	22	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各標高ごとの降水の同位体については計測されていないが、そもそも標高を決めるときの降水の値はどうされたのか。 その場合、基準とした標高の同位体比は分かるが、標高の変化に応じて同位体比がどう変わるかを求めるためには$y=ax+b$のaの傾きを求める必要があるのではないか。 クレイグの天水線をそのまま使われたということだが、地域性が非常に大きいということは既に分かっており、この関係式をここでも使っても良いのかどうかは疑問がある。同位体については、信州大学の宮原先生も解析しているが、季節的に大きく変化するという問題もあり、この場所は単純ではない。その様な内容についても議論しないまま標高に同位体の値を与えていることがそもそもおかしいのではないか。 大清水の湧水は値が小さいから標高の高いところから来ているということを前提に標高ごとの同位体の値を決めているのではないか。 	<p>・C,D湿地は、自記水位計や水温のデータから、地表の温度に非常に左右された湧水であり、また、電気伝導度が非常に低くシリカも非常に少ない値で雨水に近いという状況から考えて、その地域を仮に設定した場合、その上、下という形で評価いたしました。</p> <p>・酸素同位体比が100mで0.5下がるという準備書に書いてある理論がありますので、それをベースにしたものです。</p> <p>・標高というのはあくまでも表示する上での標高であり、1350mを一つの基準とした場合の、データにもつづいた標高換算になります。標準曲線というの基本的には一つのラインに乗るという前提で考えております。</p> <p>・基準標高よりも軽い同位体比からなっているということです。ちょうど採水したときの降水量が取れなかったとか、そういう問題もあったもので、我々のデータに不備があると言われていたことも分かりますが、今回の事業が、北大塩などの湧水、水源に対して影響があるかないかということ考えたとき、そこに湧いている水が基準としたC,D湿地の値よりも上か下かということを見ました。そしてそれを分かりやすくするために、一つの仮定条件の中で標高に直しました。</p>

部1	23	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湿地の水質が降水と非常に似ているということだが、季節的な変化を解明できるデータはあるか。 ・雨が降った直後と湧水の時では違うのではないかとといった疑問に答えられないので、水質についても変動を解明できるように何回も測定していただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・水質は2回か3回しかやっていないですが、電気伝導度は流量を測る時に測っています。また、水位と水温に関しては自記観測しております。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湿地の水に含まれる溶存成分は非常に少なく、地下水としての流動時間が比較的短いと判断していますが、降水と非常に似ているという評価はしていません。（資料1-1 10～11ページ） ・水質の変化の有無については、今後モニタリング調査を実施して確認していきます。
部1	24	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・降水の同位体比には季節変化がある。降水と湧水の同位体比は変動するが、湧水の同位体比に季節変動があるかないかで、非常に長い滞留時間を持った大きな地下水なのか、浅いところからすぐ出てくる地下水なのかという解明すべき問題がある。その検討が全くないにも関わらず同位体比の値が小さいので事業計画地より上の方からやってくるから全く関係ありませんという評価が非常に不思議である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最近の降水量をとっており現在分析中ですので、そういうことも最終的には評価したいと思います。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水素・酸素同位体は、涵養域の推定を行うために実施していますが、この結果のみで地下水の流動について示しているわけではありません。 ・また、北大塩大清水水源については、これまでに5回（準備書には3回の結果を示し、その後2回実施）同位体分析を行っています、その同位体比は概ね同様の結果となっています。（資料1-1 14ページ） ・部1-9の回答にもあるように降雨の水素・酸素同位体分析は実施しておりませんが、主成分分析結果からC、D湿地の湧水が調査地内で最も狭い流動範囲であると判断した上で、湧水の涵養域がC、D湿地（対象事業実施区域）の湧水の涵養域に比べて高いのか、同程度か、また低いのかという検討を行いました。（資料1-1 8～14ページ） ・各湧水の涵養域については、C、D湿地の湧水点の標高を基準とし、それぞれの湧水の涵養標高の平均がどこなのか、地質分布（帯水層分布）を考慮したときにどのあたりが涵養域として想定されるのかを検討しています。（資料1-1 13～14ページ）
部1	25	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書には解釈の結果だけが記載されており、安定同位体を使った標高値の求め方、プロセス、考え方、確実性、不確実性が分からない。予測評価の妥当性を検証できるように解析から解釈に至る経過資料を提示されたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・了解しました。水質に関しては不確実性がかなりあると思います。 <p>【事後回答（第2回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安定同位体（水素・酸素同位体）を用いた標高値（涵養域）の検討についての説明は、部1-9の回答と同じ内容です。
1	25	水象	鈴木委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南沢水源は対象地域の水に近いとのことだが、No. 23, 24の意見も踏まえた見解を伺いたい。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>No. 23の見解と同じです。</p>
1	26	水象	北原委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-92ページに「流出係数は、ある降雨に対して直接河川に流出する割合であり、タンクモデルでは表面流出量に当たり、1段タンクからの流出量に相当する。」と書かれているが、流出係数の定義はこういうものではない。流出係数は洪水流量や濁水の予測、調整池の堰堤の規模などを決める大きな係数であり、合理式中のピーク流量を洪水到達時間内の平均降雨強度と面積で割って算出するものである。こういう定義は一般的ではない。何を出典にしているか。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>ご指摘の通り、準備書の予測検討で用いたタンクモデルは、低水流量の予測、日単位での予測、年収支の予測を行うために構築し、工事に伴う河川の基底流量の変化量や地下深部への浸透量の変化の検討を行いました。地下水用語集（日本地下水学会 編）では、「ある期間における流域から累積河川流出量を流域内に降った累積降水量で除した値を流出率もしくは流出係数という。」と定義されている定義を基に、準備書内では「流出係数」という用語を使用して記載していました。また、予測検討では、工事中・供用後に変化する流出係数分はタンクモデルの1段タンクから2段タンクには浸透しない（地下水として供給されない）ような条件設定を行って検討を行っています。ご指摘いただいたように、降雨量に対して地表を流下する雨水の割合を表すものを「流出係数」と記載し、タンクモデル法を用いた計算により予測した表面流出量の割合は前段で説明を述べた上で「表面流出割合」等のように区別して記載するべきと考えます。水収支結果の説明に際しては、誤解を招かぬよう注意し、評価書の中で修正・記載いたします。</p>
1	27	水象	北原委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンクモデルは低水流量の予測、日単位での予測、年収支などのために使うものである。短期流出、洪水の流出を長期のモデルであるタンクモデルと同じにすることは適当ではない。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>ご指摘の通り、準備書の予測検討で用いたタンクモデルは、低水流量の予測、日単位での予測、年収支の予測を行うために構築し、工事に伴う河川の基底流量の変化量や地下深部への浸透量の変化の検討を行いました。短期流出や洪水時の流出量を検討するためには使用しておりません。</p>

1	28	水象	北原委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 流出係数の求め方が間違っている。準備書4-6-88ページのタンクモデルにおいて、タンクの1段目の側方からの流出口が2つあり、ここから出ている量を表面流出量としているが、これは河川流量のうちの表面流出量である。河川流量はこれに中間流出、地下水流出という2段階、3段階の流量が加わるので、タンクモデルの1段目の表面流出量だけで計算すると非常に小さな値になってしまう。そのため、表4-6-31のタンクモデルによる表面流出率（流出係数）が、この値がとてもしゃい値になっている。 森林でも流出係数がそこそこ大きくなる理由は、50年確率や100年確率といった大きな出水の時の値から計算しているからである。このような小さな値が出るのは、1、2年しか観測していないため対象とする降雨が非常に小さかったことを表している。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>ご意見にありますように、タンクモデルの1段目から3段目の側方から流出分を河川流量として実測流量との同定・影響予測を行っています（準備書P4-6-87、図4-6-55の概要図に記載）。本検討の結果、表面流出分の割合が小さい予測結果となったのは実測流量にあわせた流量再現結果によるものであり、茅野横河川流域全体の地下水涵養量が大きいためと考えています。流出係数についての記載は、No. 26に示すように、誤解を招かぬよう「流出係数」と「表面流出割合」等の記載に改め、評価書で修正・記載いたします。</p>
1	29	水象	北原委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> 準備書4-6-92ページでは、表面流出率（流出係数）と記載されているが、以降は表面流出率という言葉がなくなり全て流出係数になっている。これは言葉のすり替えであり不適切である。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>流出係数についての記載は、No. 26に示すように、誤解を招かぬよう「流出係数」と「表面流出割合」等の記載に改め、評価書で修正・記載いたします。</p>
1	30	水象	北原委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> タンクモデルは日単位で計算していることに対し、観測そのものは1時間インターバルで観測しているが、それではピーク流量は測れない。1時間単位のを24時間合計し、それを24で割ったものがピーク流量として以降の図に出ているが、これでは小さくなってしまっているので不適切である。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>本準備書では工事に伴う水収支の変化について予測するため、1時間単位での自記流量観測の測定、日単位の値（1時間単位の値の平均値）によるタンクモデル法を用いた流出解析を行っています。洪水流量の計測・予測を目的としていないため、ピーク流量を測定するため測定（10分間隔での自記観測等）は行っていません。</p>
1	31	水象	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 4-6-19（表4-6-5）：ソーンズウェイトで可能蒸発散量を算出しているが、この値は「可能」であり、水面からの蒸発量あるいは非常に湿潤な土壌に生育した植生からの蒸発散量である。実際の蒸発散量（実蒸発散量）は、可能蒸発散量の0.7～0.9程度の値となる。したがって、準備書4-6-37（表4-6-8）で算出した564mmよりかなり小さい値となるはずである。なお、事業対象地の標高（1250～1500m程度）では実蒸発散量は500mm以下となると推定される。再計算が必要と考える。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>蒸発散量については、気候学・水文学で一般的に用いられる経験式によるソーンズウェイト法から算出した値を用いました。ご指摘の可能蒸発散量×0.7～0.9程度や、事業対象地（1,250～1,500m程度）の実蒸発散量が500mm/年以下といった明確な根拠を得ていないため、ソーンズウェイト法により算出した値を採用しています。</p>
1	32	水象	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 4-6-37（表4-6-8）では、蒸発散量564mm/年、準備書4-6-6（表4-6-17）では580mm/ほぼ1年、4-6-69～71では445mm/年としているが、値が異なるのはなぜか。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>蒸発散量の違いは、検討期間（集計期間）の違いによるものです。すべて準備書P4-6-19(表4-6-5)に示すソーンズウェイト法による可能蒸発散量表を基に集計しています。</p> <p>P4-6-37(表4-6-8)の集計期間はH28. 1～12 (H29. 1観測値の概略水収支検討のため)</p> <p>P4-6-61(表4-6-17)の集計期間はH28. 8～H29. 8 (自記観測データを用いた概略水収支検討のため)</p> <p>P4-6-69～71(図4-6-43～45、以降の予測結果を含む)の集計期間：H28. 8～H29. 6 (検討実施時の観測期間)・・・P4-6-88に記載</p>
1	33	水象	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> 4-6-78：調整池の周辺地下水位の影響範囲を暗渠の式で予測しているが、この式は難透水層、地表面とも水平な場合に用いられる式であり、山地斜面の予測には不適である。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <p>調整池構築に伴う周辺地下水変化の検討（工事中：P4-6-75～81、供用後：P4-6-123～127）を行う上で、まず収支的に下流部への流量変化の影響について考えました。その結果、調整池えん堤部（最下流部）の水位は現況と変化しないことから、収支的に調整池建設による地下水流動量の変化は発生しないと判断しています。その上で、掘削に伴う水位の低下について検討を行うことを目的とし、調整池計画箇所から数十～数百m離れた湿地分布域に水位低下の影響が及ぶか否かについて予測を行いました。</p> <p>なお、一般的に用いられる水位低下の検討については、暗渠の式同様、ご指摘のとおり地下水面が水平な場合であることが適用要件となるものの、調整池の掘削面が崖錐性堆積物から強風化安山岩を主体とする帯水層にあたることならびに、調整池予定地付近（特に河床付近）の地層勾配が緩い（図P4-8-10、P4-8-14、P4-8-18参照）と想定されることから、水位低下が湿地分布域におよぶか否かという検討としては適用できるものとして判断しました。また、暗渠の式でも地下水勾配について考慮することとなっておりますので、地下水勾配として考えられる地形勾配を採用して検討していません。</p>

1	34	水象	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-92では、「流出係数は～タンクモデルの表面流出量に当たり、1段タンクからの流出量に相当する。以下省略。」としてタンクモデルから流出係数を求めているが、以下の点で明らかな間違いである。 (1) 流出係数の定義は、合理式中においてピーク流量Q_pを洪水到達時間内の平均降雨強度rと流域面積で除して単位調整したものであり、タンクモデルから算出されるものではなく、タンクモデルを使うことは明らかな間違いである。 (2) 河川のピーク流量には中間流出成分、地下水流出成分が含まれており、1段目の表面流出成分だけではピーク流量を反映していない。したがって、この方法で求めた流出係数は過小となる。 (3) 準備書に使われたタンクモデルは、全て日単位の水収支用として長期流出を対象に作成されており、洪水流量を対象とする短期流出には対応できない。 (4) そもそも流出係数は、50年確率以上の降雨を対象としており、1～2年程度の観測期間から算出されるものではない。小さい降雨から算出された流出係数は小さくなるのが当然である。この表4-6-31の流出係数を用いるのは明らかな間違いである。 (5) 準備書4-6-92の表4-6-31の表題では、「タンクモデルによる表面流出(流出係数)」としているが、これ以降は単に「流出係数」と呼んでおり、著しく不誠実である。 (6) 準備書4-6-53では、流量算出のための自記水位観測を1時間インターバルで行っているが、山地小流域の大出水時のピーク流量は、立ち上がり、減水とも急激であり、1時間インターバルでは観測もれを起こす。 <p>以上より、準備書中で用いられた現況流出係数の値は、根拠もなくまた著しく過小であり使用できない。したがって、4-6-67工事中の流出係数、4-6-96供用後の流出係数とも算定値を修正すべきである。また、この値を用いて算出した洪水流量予測、調整池の規模、調整池から流出する濁度予測、地下水かん養量など多岐にわたる計算は全て修正すべきである。</p>	<p>【事後回答(第1回水象部会)】</p> <p>No.26, No.27の見解と同じです。</p>
1	35	水象	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料1の番号117(準備書4-6-67)では、工事中の流出係数としてパネル設置前であるから浸透能力小の草地の値0.75を用いているが、資料1で指摘されているように、あくまでも県の林地開発許可申請の手引きに従い、1.0または0.90を採用すべきである。手引きを勝手に解釈することは控えていただきたい。事業者見解(R1.6.5)では、「流出係数が1.0は年間に降った雨が全く浸透せずに表面流出となることを意味し、水象のシミュレーションを実施する条件とするには適さないと考えます」とあるが、流出係数は年単位で使うものではなく、大雨による大出水時の流出を対象としたものである。この点からも、事業者は流出係数に対して著しく無理解であると言わざるを得ない。 	<p>【事後回答(第1回水象部会)】</p> <p>流出係数については、長野県からの質問に対する回答(技術委員会資料1)に記載の通り、工事中の予測は「樹木伐採後かつパネル設置前」の予測検討を行う上で、仮定条件として「草地相当の流出係数0.75」としました。さらに、供用後の予測として、「改変エリア全域にパネルを設置」した場合の最悪の条件を考慮し、「裸地相当の流出係数0.90」として検討を行いました。</p> <p>また、流出係数を適用する際には、タンクモデルにおいて計算単位である日ごとに「(1-流出係数)：流出係数が0.90の場合は0.10分」のみが涵蓋しうるものとして条件設定を行い、洪水時に限らずすべての雨に対してこの流出係数の適用を行いました。その際に設定する流出係数を1.0とすることが水象のシミュレーションを実施する上で現実的に適さない条件となると判断し、見解として述べさせていただいておりました。</p>
部1	26	水象	北原委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・流出係数は洪水流といった短期流出に使うものであり長期流出には使わない。日単位の流出係数は存在しないため、表面流出率や日流出率などの表現に改めていただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最終的には修正します。誤解を招くような表現になっておりました。
1	36	水象	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4-6-128予測結果の信頼性：タンクモデルによる再現年流出量と実測流出量の相対誤差が0.149-0.174の範囲であるから、作成されたタンクの信頼性が高いとしているが、作成されたタンクは日流出量を対象としたものであり、洪水流出に適合させたものではない。表4-6-47で信頼性が述べられているが、洪水時の河川流量の予測まで言及できないはずである。 	<p>【事後回答(第1回水象部会)】</p> <p>タンクモデルによる流量再現検討は、日流出量を再現対象としており、低水流量の再現ならびに検討期間の水収支量の予測検討に用いています。ご指摘の様な洪水流出量の検討を行うために実施したものではありません。そのため、No.27に示す見解の通り、当タンクモデルによる再現流量は洪水時の河川流量の予測には使用しておりません。</p>
1	37	水象	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4-6-108～111：流量変化を縦軸$m^3/分$であらわしているが、分単位のハイドログラフと誤解される。観測インターバルは1時間なのでこれを分にするのは問題がある。日流量を分に換算した旨を明記すべきである。また最大日流量(図中のピーク)は1時間インターバルで観測された1日分24データを平均したものの最大値であり、洪水流出のピーク流量は瞬時の値であるためはるかに大きな値となることに注意すべきである。 	<p>【事後回答(第1回水象部会)】</p> <p>流量変化のグラフは流量の単位として示したものです。わかりやすく「日流量を分に換算した旨」を評価書で加筆します。また、本予測検討では洪水流量の検討は行っていません。調整池等の設計に必要な洪水流量の検討にも当予測結果は用いていません。</p>

部1	27	水象	梅崎委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・涵養量と流出量がどのように変わるかということの議論がされていない。地下水流動の機構や経路が分からないということは問題がある。涵養量が変わって流出に変化が起きたときに、どう影響があるか説明いただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一年間の自記観測での流量をベースに、タンクモデルで流域の流出を考えています。今回、流出係数は0.9として1段タンクから2段タンクに落ちる量を抑えています。この条件で計算しても大きな影響はなく、横河川の下流域の地下水流出についても、大きな変化は見られないという結果が得られています。
部1	28	水象	梅崎委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この流域の浸透と流出を考えるときのモデルとしてタンクモデルを使っているとのことだが、タンクの層や係数をどう考えるのかということをお願いしたい。 ・実際の現地の地層や透水性についてはどう考えているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回審議で、タンクモデルというのは洪水流量ではなく低水流量を見るものだ御指摘がありました点についてはそのとおりです。 ・タンクの考え方については、準備書4-6-86, 87ページに記載しており、1段タンクを表面流出成分、2段タンクを中間流出成分、3段タンクを地下水流出ということでモデルを構築しております。モデルは自記観測のデータをベースにしており、準備書4-6-90, 91ページにモデルと実測との関係を示しております。なお、係数の決定は、試行錯誤し自記データや実測データとの平方誤差が極力小さくなるようフィッティングしております。 ・今回の変更は、木を切ることによって流出係数が変わり浸透量が減少するというものであり、地盤そのものが変化するわけではありませんので、フィッティングにより得られた係数は変えず、入る量だけ減らした時に表面流出がどのように現状と変わっていくかということを検討しました。 ・タンクモデルそのものが地質を全く考えず、表面流出、地下水流出の流出形態にフィッティングさせるというものになります。
部1	29	水象	梅崎委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-91ページの図4-6-59について、タンクモデルによる計算流量と実測流量で合っていないところがあるが、その解釈を御説明いただきたい。 (鈴木部会長) ・本来は欠測値であり誤解を招くので、明記するか書かない方がよいのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表面の凍結などにより完璧な流出が押さえられていないため合っておりません。特に凍結が顕著だったのがY-9であり、Y-7についても所々合っていないところがあります。 ・図面の中にそのように記載いたします。
部1	30	水象	梅崎委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンクモデルによる検討で得られたパラメーターを使うと、この範囲の雨量が降るとここに出てくるというのは全部一応合っているということか。 ・そういったこともしっかり説明いただきたい。 (鈴木部会長) ・日100mmとか200mmというデータでやるとまた違うモデルになってしまうが、全体的にはそれで説明できるのがタンクモデルである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・そのとおりです。ですので先ほど言われました150mm、200mmが降った時どうなるのかということもモデルの中で検証することも出来るということになります。 ・そういったことも記載するようにいたします。 ・アセスメントは1,2年くらいの調査で結果を出すことが求められる場合が多いので、その年はどうなのということがいつも付きまとう問題になります。ですので私たちの出来ることは、出来るだけモニタリングを長くやってそれが本当に合っていたのか後で検証して振り返り、間違っていればそこでちゃんと直すとかそういうことが約束できるかどうか影響評価の一番大事なところではないかと思っています。 ・1年の調査結果による予測が完璧に正しいとは毛頭申し上げるつもりはなく、ある一定の条件のもとで計測した観測値に、一定の条件のパラメーターを与えて、その結果を示しているだけに過ぎないということは理解しております。
部1	31	水象	北原委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンクモデルは長期流出を求めるものであり、洪水流量の時のデータがないとフィッティングさせるのが難しいため、1年間の測定期間では足りない。準備書4-5-14ページに最大降雨時のデータがあるが、降雨強度を平均すると、時間雨量で2.3mmと小さい値を対象にしており、このタンクモデルの妥当性が検討できない。 ・このモデルは50, 60mm以下の降雨量なら適用できるが、それでは弱い。これを超す雨になれば、上にまた口ができるかもしれない、タンクも口の大きさも変えなければいけない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備書の4-5-14ページの値は濁水の予測に用いた降水量であり、タンクモデルの検討に使った値ではありません。タンクモデルの検討に使った値は、準備書4-6-90, 91ページに一部のデータを示しており、一番多い降水量は、日降水量で50, 60mmくらいになります。 ・準備書に掲載しているのはこれだけですが、去年から同じように自記観測を連続してとっています。1年で評価することが本当にいいのかどうかは当然あると思いますので、モニタリングとして今から降水量に応じたデータを蓄積している最中です。確率降雨からいえばといううなものは今のところまだ取れていないですが、少なくとも100mm以上の降雨のものについては取れていると思います。

部1	32	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単純な面積から考えても、ある流域の何割かを事業計画地が占めるので、全く影響がないとは思えない。影響がないというためには、ものすごく深くまで浸透する、またはすぐ浅いところで川に湧出するなどの理由を説明する必要がある。それができないのであれば、影響がないという見解はあり得ない。 ・極めて小さいという日本語は、ほとんどないという意味ではないか。 ・モデルはあくまでもモデルであり、仮定を設ければいくらかでも結果は出る。横河川の流量の予測については、モデルそのものが未完成なのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各水源、湧水に対する影響の予測結果は準備書4-6-118ページなどに示しておりますが、影響がないとは記載しておらず、影響は極めて小さいと表現しております。また、予測には一定の不確実性がありますので、モニタリングを行うことを記載しております。 ・言葉の問題かもしれませんが、今回の我々のシミュレーションの結果から見て、例えば南沢水源に影響が出て取水制限しなければならなくなるとか、北大塩大清水水源の水が枯れてしまうといった予測結果にはなっていないということでございます。また、影響が極めて少ないと判断したもう一つの材料として、流出係数を0.9として予測しても、横河川の最下流部の流量が基底流量を含めてあまり大きな変化がないことがあります。もし地質構造に対して横河川から北大塩の方に地下水が行っていると考えれば、横河川そのものの流量もかなり変化すると思いますが、流量そのものが大きく変化していないことも一つの判断材料にしました。
部1	33	水象	北原委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横河川の流量変化があまりないことが、大清水水源への影響が極めて小さいと判断した傍証と説明しているが、事業区域に対して横河川全体の流域面積は広く、検証地点の流量はすごい広い流域面積を持っている。事業区域を含めた大きな森林流域で考えると事業区域の影響は薄まってしまう。その解析内容にて大きな変化がないとするのはおかしいのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出ている湧水というのは、我々も基本的にはそのエリアからピンポイントで来ているわけではないと思います。北大塩大清水水源にしる南沢水源にしる、霧ヶ峰全体からの地下水が出ていると思いますが、事業区域での涵養量の減少がそれぞれの水源に対してどれくらいの影響を及ぼすか検討いたしました。
部1	34	水象	富樫委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・流域面積はどのように考えているか。 ・（方法書への知事意見でもすでに指摘されていたことだが）地下水と地表の流れとを合わせて考えなければならず、流域の取り方は非常に大事になってくる。それを単純に地形の現在の流域で区切ってしまっただけでは、大事どころの議論がなされない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・流域面積は地形図上から拾っております。ただし、事業区域の中で、水質や形態から明らかに他流域から来ていることが分かる場所に関しては、このモデルにも書いてありますように、他流域からの流出分を量として常時与えるようにし、流域外の水を入れております。
部1	35	水象	北原委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソーンズウェイトの計算に標高の低い農場の気温を用いており、流域全体の蒸発散量を推定すると564mmよりかなり小さくなるはずではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・農場の気温は横河川のあるあたりの流域の平均標高を示していると考えました。当然流域の中で上から下まで標高が違ってくるわけですので、平均的な標高ということで取りました。
部1	36	水象	北原委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソーンズウェイトは諏訪湖のような水面や田んぼのような状態での可能蒸発散量であり、実蒸発散量はそれよりかなり小さくなる。資料2のNo. 31に対する事業者の見解では明確な根拠が得られていないと書かれているが、少なくとも数割は違うはずである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-97ページ等で蒸発散量の検討をしております。樹木の蒸発散量は論文のデータを引用していますが、森林からは蒸散量が多いので、この値を使うと事業による樹木の伐採により地下浸透量が多くなり、シミュレーション上は地下水涵養への影響がどんどん小さくなってしまいます。そのため、あえてこの値は使わず、地下水への影響が大きくなるソーンズウェイトで求めた値を使っています。 ・蒸発散量は根拠となるようなデータを求めることが非常に難しいためソーンズウェイトを行いました。
部1	37	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地下水と災害は表裏一体の問題であり、蒸発散量の減少により地下水涵養が増えるのではなく、逆に表面流出が増えるのではないか。そうすると水循環の話に加えて災害の問題が関わってくる。 ・この部分と調整池の計算で流出を考えるとときの値は、違う値を使っているということか。本来はお互いに同じ値を使った上で、大きい方や小さい方に振れるから大丈夫だという議論を行うべきではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・表面流出量が増えて災害が増えるのではないかとすることはここでは扱っておらず、調整池の計算などで別の防災の条件を使って検討しております。ここはあくまでも地下水の涵養が減らないかという観点で、より安全サイドに立った設定をしております。 ・より安全側に、最大でどのくらいの影響が出るかを計算することが目的ですので、違う値を使っております。流出係数などの共通する値については同じ値を使っていますが、ここについてはより影響が出る値を使っています。

部1	38	水象	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-69ページから流域ごとの水収支結果の図があるが、蒸発散量が工事前と工事後で同じ値なのは現実的ではなく非常に不思議である。本来は伐採したらこうなるという値を入れたものがあつた上で、安全側の仮定により検討すべきではないか。 ・準備書4-6-101ページ等の図からは、変更しても変更しなくても同じ蒸発散量だということしか判断できない。文章で書いてあつても図表だけが独り歩きすることが多いので、図中に分かるように記載いただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備書4-6-100ページに、森林伐採による影響を考慮して蒸発散量を変更した場合と、ソーンズウェイトで求めた現状蒸発散量を用いた場合の各流域の年間の水収支を計算しております。その結果、現状の蒸発散量を用いた方が浸透量への影響が大きくなるため、供用後についても現状の値を用いて評価しております。 ・水象については影響が大きくなるパラメータを採用して予測しておりますので、本当は違うのではないかと御意見についてはそのとおりだと考えております。我々は影響がないとは申し上げておらず、どこに変化が現れるかが問題になると考え、保全対象である北大塩大清水水源、南沢水源、周辺井戸、事業地内の湿地などについて影響予測しております。その中で、流出係数、蒸発散量などの条件を入れる時には、保全対象の湧水に対して一番影響が出てくれらいいということを予測したというのが全体の流れになります。 ・分かりました。そういうことであれば、この図に適切な注釈が必要だと思いますので、こういう条件設定のもとにシミュレーションした結果をこの図として示していますという解説をつけて、誤解がないようにさせていただきますと思います。
部1	39	水象	梅崎委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検討の項目ごとに安全側を使うことはよいと思うが、なぜ蒸発散量だけ変えたのか疑問である。安全側の取り方の考え方について説明いただきたい。 ・そういった説明についても、しっかりお示しいただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・流出係数についても0.9としていますが、トタン板のように斜面全面にパネルを張るのではなく一定の隔離を取ってパネルを張りますし、土地造成をほとんどせず斜面なりにパネルを張っていきますので、実際にパネルを設置したところが0.9で流出するかというのは疑問しいところがあると思います。ただ、より影響を考えて0.9という値を設定しています。 ・また、事後調査として、周辺の河川流量、湿地の水位、湧水の量の連続観測を行い、必要があればシミュレーションがどこまで正しかったのかということの後で検証できるようなデータを蓄積している状況です。 ・準備書4-6-101ページから始まる図だけでなく、いろんな図を概念図として載せておりますが、必要な解説を付けて誤解がないように示していきたいと思ひます。
1	38	地形・地質	富樫委員	<p>【第1回審議】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パネルは尾根筋に設置し沢筋はいじらない計画として影響を検討されているが、きちんと評価するためには尾根と沢の間にどういふ地質があるのかという基本的な情報が必要である。代表的な地点での谷の深さ分の長さの地質ボーリングがないと、影響の有無も非常に信びよう性の薄い話になってしまう。事業計画地内でボーリングをされているが、そういう観点での調査はされているか。 ・あくまでも造成工事のための地盤調査としての調査だけということではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調整池等の設計のためのボーリング調査を実施しましたが、ご指摘の事業地内の地質確認のためのボーリング調査は実施していません。 ・基本的にはご指摘のとおりです。ただし、その結果を参考に地形地質を検討しています。
部1	40	地形・地質	鈴木部会長	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調整池は10m掘る計画であり、表面の流れだけでなく帯水層が何メートルの所にあつて、どういふ方向に流れているかといったことが分からないと調整池の設計は出来ないのではないか。 ・ボーリング調査は、調整池を作る場所の地下部分のみの実施という認識でよいか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調整池に関しては計画地点でボーリング調査を行っており、調整池付近の地質状況は把握しております。安定的に構造物が出来る地盤があるかどうかという評価はしております、ボーリングの途中で孔内水位の変化も確認しており、調整池計画地点では、一般的な調整池が作れるという確認まではしております。 ・浸透流についても評価しており、満水になった時に調整池の堤体、周辺の地盤から浸透流が外に出ないという所は確認しております。 ・おっしゃるとおりです。
1	39	地形・地質	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4-8-12など：調整池堰堤の中詰土として現地発生土（Dtc）を使う旨が記されているが、φが5度という、著しく小さい土を使用することは堤体の不安定を招くのでやめるべきである。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中詰材の主体は強風化岩層となると考えております。 ・表土等、中詰材に不適合な土砂は除外するようにいたします。
1	40	地形・地質	北原委員	<p>【第1回追加意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4-8-36：調整池の洪水調整容量（表4-8-36）：この表の値は、水象項で指摘しているとおりの不適切な流出係数から算出したものであり、大幅に修正されるべきものである。 	<p>【事後回答（第1回水象部会）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・林地開発の設計基準に則り、開発前の流出係数を0.6、開発後の流出係数を0.9として検討しております。
部1	41	地形・地質	北原委員	<p>【第1回水象部会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調整池の貯水容量の計算にも日単位の流出係数を使っているのか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調整池については、通常合理式と言われる簡便式、もしくは厳密解法の2つの中から評価して、適切な方を指導いただきながら決めていくという形でございます。流出係数についても、調整池の計算の中で決められている数値がございますので、今御議論いただいている内容とは、名称は流出係数になってしまひますが、実態としては違うものになっております。

1	41	地形・地質	北原委員	【第1回追加意見】 ・ダブルウォール堰堤は、越流に越流に弱く、また現地の堤底部分は安山岩の強風化岩であるが、許容支持力は担保できるのか疑問がある。	【事後回答（第1回水象部会）】 ・堤体上を越水しないよう、堤体の一部に余水吐を設けた構造としています。 ・支持力については、鋼矢板を用いて基礎地盤を拘束して支持力確保を行う手法で安定性を確認しております。
1	42	地形・地質	北原委員	【第1回追加意見】 ・対象地は土石流の危険性が低いとしているが、河床には亜角礫が多数認められ、土石流の可能性は十分にある。この流域では溪岸が急峻であり、溪岸崩壊か土石流が発生した可能性が高い。決して土石流の危険性が低いわけではないと考える。	【事後回答（第1回水象部会）】 ・本計画地は土石流危険渓流の流域には含まれていますが、砂防指定地等の指定はなく、土石流時の安定性評価は行っておりません。
1	43	地形・地質	鈴木委員	【第1回追加意見】 ・資料2-1の134p 土砂流出防止対策として、「調整池の中に土砂を貯める部分を設計します」と記載されています。 しかし、この絵のような方法では、掃流土砂はある程度貯められても、浮流土砂を溜めることは出来ないのではないのでしょうか。 つまり、排出時には濁流が流れ、下流に影響を及ぼすと考えられますが、論理的に説明してください。	【事後回答（第1回水象部会）】 ・調整池容量に包含する堆砂土砂量を対象として堆砂エリアの面積を広く確保する事で水面積負荷を出来るだけ小さくする事で浮流土砂の沈降を促す計画とします。 ・また、排水塔に配置するオリフィスは複数箇所としてできる限り流出量を抑止しながら排水する事で降雨強度が高くなった場合でも出来るだけ浮流土砂の沈降を促す計画とします。 ・さらに、上記計画に併用して改変部分全面（ソーラーパネル設置範囲を含む全ての伐採区域）に侵食防止材を敷設する事で土砂の流出を抑制する事を検討します。
1	44	地形・地質	鈴木委員	【第1回追加意見】 ・資料2-1の135p 50年確率強度式にて洪水調整容量を計算されています。 これらの値の根拠となる、各流域の流域図と流域面積、入力した総降水量、流出係数などを示し、計算過程もわかるように説明してください。	【事後回答（第1回水象部会）】 ・計算過程の資料をお示しします。 ※現在、検討中です。 【事後回答（第2回審議）】 A、B、C調整池の簡便法による調整容量計算資料を提出致します。 ・各流域図と土地利用状況 ・流出係数の算出資料 ・簡便法による各調整池の調整量計算書
部1	42	地形・地質	北原委員	【第1回水象部会】 ・資料2のNo.44と共通するが、50年確率降雨強度で洪水流出量を計算した方法をお示しいただきたい。 (鈴木部会長) ・あくまでも準備書に書かれていることに対する質問なので、検討の過程があるのであればお示しいただきたい。また、ここでは10分間降水量で計算されているが、県の指針では1時間降水量になっているはずであり、その根拠も含めてお願いしたい。	・調整池の計算については、防災調整池等技術基準案という本に示されています簡便法及び厳密解法の2つを使い検討しております。 ・準備書作成時点では、80年確率くらいまで貯留量がある大きめの調整池を想定しており、その際の計算書は手元にありますが、いろいろ御意見いただくなかで、調整池を50年確率にして改変面積を減らせないかですとか、水面の負荷を減らすことでできるだけ土砂を沈降できないかとか、さらにはレインオンスノーの話もありまして、そういったものを踏まえて、調整池のサイズを少し小さくして改変面積を減らそうということを現在検討しており、中途半端な状況での資料の提出は控えさせていただきました。 【事後回答（第2回水象部会）】 ・資料は上記44番回答時に提出済みです。（資料1-4） ・調整池の流域面積によって、降雨の継続時間はA調整池は30分、B調整池は10分、C調整池は30分としています。 これは林地開発の手引きに示される流入時間＝洪水時間として計算しています。
部1	43	地形・地質	北原委員	【第1回水象部会】 ・短期流出、洪水流出については、準備書で検討されないのか。 (鈴木部会長) ・少なくとも次回以降には資料が提示されるとの理解でよいか。	・防災の中で災害が起きないような調整池の設計ですとか、そういった場面で検討されることになります。 ・防災については、調整池の検討の中で次回お示しいたします。 【事後回答（第2回水象部会）】 ・防災調整池は50年確率で設計を行っており、そこに含まれる流出については対応可能と考えます。
1	57	事業計画	梅崎委員	【第1回審議】 ・調整池は大雨の際のプラス要因だが、改変量が多いので動植物の関係で問題になっていると思われる。最下流にこれだけの水量を溜めるダムを造らなければならないのか。分けたりすることはできないか。	【事後回答（第1回水象部会）】 ・開発範囲の上流域に比較的貴重種が多いことから、環境への負荷をなるべく減らすため、影響の少ないと考えられる下流に集中して調整池の整備を行っております。
部1	44	その他	鈴木部会長	【第1回水象部会】 ・委員会で呈された質問や疑問に対しては、軽微なものについては表形式の事業者見解記述で結構であるが、課題の大きな内容については、図表や使用した計算式など解析経過を示す資料を整理して回答いただきたい。	【事後回答（第2回水象部会）】 追加的にPPT資料や図面などを用意いたしました。